これからの社会福祉の理論に対する一考察

－生活保護問題に存在する人間存在の視点への着目から－

○　川崎医療福祉大学　直島　克樹（6815）

キーワード：スパイラル構造，人間存在，３つの主体性認識

１．研 究 目 的

近年，生活保護に対する批難はさらに勢いを増し，生活保護受給者へのバッシング，さらには生活保護費の削減などが様々なところで噴出している。これらの主張の根拠として示されるロジックは，生活保護受給者が戦後最大であり，さらに就労可能な若者が増加していること，そして不正受給の増大，医療扶助の増大に伴う過剰診療，生活保護費の増大に伴う財政の圧迫などである。しかしながら，これらの示される根拠が，いかに表面的な一部の情報を都合よく切り取ったものであり，むしろ本当に考慮されるべき問題の本質を覆い隠してしまっていることは，多くの実践者・研究者がすでに指摘するところである。

一方で，こういった生活保護に関連する問題は，生活者すべての生活に直結し，人間の存在や価値のあり方にも関連している社会福祉の根本的問題であると考えられる。そうであるにもかかわらず，昨今の状況を踏まえた社会福祉の理論が，今後どうあるべきかを問う研究はほとんど進んでいないといえよう。社会福祉の理論とは，人間存在の否定や危機の状況にストップを懸けるべき原理を示し，現状への支援の展開を導きながら，これからの社会福祉を創造していくことを可能とするものでなければならないはずである。

そこで本研究では，近年の生活保護問題を採り上げる中で，その問題に内在する原理的課題について考察を深めていく。そして，その課題となる視点からこれからの社会福祉の理論がどのようにあるべきかについて考察を試み，昨今の状況に対しても有効性を持つ社会福祉の理論の基礎的側面を明らかにすることを目的としている。

２．研究の視点および方法

本研究では，近年の生活保護に関する問題が，これからの社会福祉の理論に問いかけている原理的側面の抽出を一つの課題としている。その抽出された原理的な課題を一つの視点として，これからの社会福祉の理論的検討を試みていくことが，本研究の基本的なスタンスである。それゆえ，昨今の生活保護問題についての基本的な問題整理，また，その生活保護問題が問いかける原理的課題の分析について，主に文献研究を用いて進め，その視点からこれからの社会福祉の理論への考察を深めている。

３．倫理的配慮

文献研究に関し､先行業績としての他説と自説との峻別を明確にするよう注意を払った。

４．研 究 結 果

これまでの生活保護問題に対する先行研究，ならびに官公庁より公表されている統計結果によれば，生活保護受給者の単純な増加は，高齢化を基盤とした人口構造の変容が第一義的にあり，そこに様々な就業構造，産業構造などの経済的側面が複雑に絡み合っていることにある。そのため，それは単なる労働意思などの問題に帰結できるものではなく，年金制度や雇用施策等の脆弱な社会保障システムそのもの，経済・産業政策等の問題と関連付けられるものである。また，本来生活保護の漏給と濫給に対して，同時的に対応してこその適正化が，捕捉率の低さを問わず，後者のみを焦点としてさらなる「適正化」を行うことによる人間存在の否定，生存権の侵害が深刻さを増している。同時に，客観的な証拠よりも，感情が社会を動かすことを可能とする情報システムと，そういった状況をより助長する方向を作り出している文化的側面の問題などが存在している。

以上は先行研究の整理から明らかになった側面であるが，こういった側面の背景には，“自律的に就労を行い,給付を受けないことに人間としての生きる価値を認める”という，固定化した人間性のあり方が存在している。そして，その観念が決して国家や地方自治体のような社会的側面のみならず，同じ市民の側からも補強され，そのことがさらに社会的側面の圧力を増強させているというより複雑な現状が，さらなる文献研究によって確認された。つまり，生活保護の問題をより深刻化させているものとして，文化的な側面まで巻き込んだ負のスパイラルが生じているのである。また同時に，人間性の固定化にあるように，福祉か就労かといったような二者択一構造が，現代の生活保護に浸透しており，負のスパイラルをさらに強固なものにしていることが明らかになった。そのため，この負のスパイラルを止めるべき原理を持った社会福祉の理論がこれから必要であることが研究の結果として示された。

５．考 察

以上の結果を踏まえ，例えば右田紀久惠によって示されている３つの主体性認識が，これからの理論的展開に一つの重要な示唆をもたらすと考えられる。すなわち，現代の生活保護問題は，生活主体としての側面を強く強調しつつ，それを保障する権利主体としての側面へ限定化し，生存主体としての側面を弱めていく構造の現れと考えられる。これからの社会福祉の理論は，今一度，生存主体としての側面を揺るがぬ基盤とした構造を組み立て，生存主体に立脚した生活主体と権利主体を再構築していくことが必要といえる。この正（生）のスパイラルを構築していくことこそ，社会福祉の政策・制度・実践のあらゆる側面に宿る原理とならねばならず，この原理に基づいた社会福祉の理論こそが，これからの社会福祉に必要不可欠な理論と考えられるのである。